

小学校における犬を用いた 『動物介在教育』(Animal Assisted Education) の試み —みんなの仲間としての学校犬バディ—

吉田太郎

2003年度より東京都杉並区にある立教女学院小学校では犬を用いた『動物介在教育』(Animal Assisted Education)を行っています。教室や教員室で子どもたちと共に学校生活を送る仲間としての学校犬バディの存在は、子どもたちにどのような影響を与えるのか、また特定の犬を教育現場に学校動物として介在させることは可能なのかということも併せて検証し、本プログラムの導入プロセスと効果、子どもたちとの取り組みなど、これまでの実践記録を報告します。

2003年度より東京都杉並区にある立教女学院小学校では犬を用いた「動物介在教育」(Animal Assisted Education)を行っている。教室や教員室で共に学校生活をおくる仲間としての学校犬の存在は、子どもたちにどのような効果を与えるのか、また、特定の犬を教育現場に学校動物として介在させることが可能なのかについても検証し、本プログラムの導入プロセスと実践成果、子どもたちとの取り組みや今後の課題などについて考察したい。

現代の子どもたちを取り巻く環境には、学級崩壊、いじめ、不登校、引きこもり、虐待、過度の受験競争、非行、薬物乱用、自傷行為など多くの精神的な不健康状態がある。そうしたストレス環境にある子どもたちの多くは、学校や学級、友人関係に適應できず、自分の「居場所」を探している。また子どもたちは生活時間の大半を学校という極めて限定された空間と人間関係の中で過ごしており、精神的重圧を感じ、意欲を失い無気力にみえる子どもも少なくない。彼らの多くはカウンセリング的な専門家による治療以前に、生理的なレベルでの「ふれあい」すなわち、スキンシップや、感触、におい、ぬくもりなど、もっと身近で基本的なコミュニケーションの回復を求めているのではないだろうか。

子どもたちが毎日の学校生活の中で介在動物の犬とふれあい、同じ時間を過ごすことで、「いのち」のぬくもりや生命の尊厳を身近に感じることを期待して、犬を用いた「動物介在教育」を実施した。



介在動物として用いた犬の犬種は牝のエアデール・テリア。通常こうした介在活動などには、盲導犬や介助犬として有名なラブラドル・レトリバーやゴールデン・レトリバーなど、陽気で穏やかな性質を持つ犬種が用いられることが多いが、「動物介在教育」に適したものとしてエアデール・テリアという犬種を選んだ。その主な理由は以下の通りである。エアデール・テリアは「キングオブテリア」と呼ばれ、テリアグループの中で最も大型であり、魅力的な容姿をもった犬種である。古くから警察犬や軍用犬として知られ、現在では国内外で災害救助犬、狩猟犬などとしても活躍している。元来テリア種は気性が荒く扱いにくいとされているが、本来のエアデール・テリアは独立心が強く利発で、忠実、人間に最も近い犬といわれており、子どもたちのパートナーとしての資質を十分に備えている。またサイズも体重20kg強と中型犬と大型犬の間で扱いやすく、毎日の学校生活で子どもたちとの生活や遊びなど、体力的にも十分に耐性があるといえる。被毛は水中で作業をするレトリバー種と同じように乾きやすく清潔を保つための日常の手入れが容易である。

学校犬バディは週に1回ずつ、すべてのクラスの授業に犬も同伴し、子どもたちと一緒に授業を受けている。当初は、ペット用サークルを使用し授業中はその中で過ごしていたのだが、子どもたちから、「サークルは檻のようでバディ

イがかわいそうだから、出してあげて、そのかわり、ちゃんと授業の前には床をきれいにしておくから」という要望があり、サークルを止めてドッグマットを使用することにした。授業の前後には、係りの児童が教員室から教室までパディの送迎をする。また夏の宿泊キャンプや遠足、運動会など、学校行事にも積極的に参加し、休日には子どもたちと地域の老人福祉施設へ訪問活動を行っている。このように毎日の学校生活の中で介在動物としての犬の存在は、コミュニケーションを豊かにし、子どもたちが様々なことに積極的に取り組むモチベーションとなっていることがわかった。

本プログラムの「動物介在教育」は、一方的に人間側から世話や飼育をすることが目的ではなく、また観察や実験のための教材として動物を用いるものでもない。コミュニケーション能力に優れた介在動物としての犬が、毎日の学校生活の中で、子どもたちと心を通い合わせることで生まれる様々な効果を期待して実施している。

今回の実践を通して、犬は直接的な「癒し」として働くわけではなく、その存在自体が子どもたちの「たのしみ」となっていることがわかった。子どもたちの中から、介在犬のパディがいるから学校が楽しい、緊張がほぐれるといった声も寄せられている。また、犬の存在は学校行事やボランティア活動への参加意欲を高め、必要とされることに気づくことで子どもたちの自己肯定観を高める助けとなっている。

教室に居場所がないと感じている子どもたちにとっては、犬とのふれあいのスペース（パデ

イルーム）が一種の避難所としての役割を果たすこともある。また、犬が大人（教師）と子ども（児童）の仲介者として関わることで、コミュニケーションを円滑に進める触媒的な働きとなっている。こういった効果は毎日の生活の中で自然発生的に生まれてくることなので、「犬の訪問」という単発のイベントとして行うのではなく、愛されている動物を子どもたちの手の届く身近な場所に継続して置き、ふれあわせるということが大切だと考えた。しかし、どの学校でも犬を飼いさえすれば、すべてがうまくいくわけでない。事故やアレルギーなどへのリスク、飼育費用など様々な問題を理解し、対応しながら進めていかなければならない。また、学校で犬を介在させるためには、教員や保護者の理解と協力をどのようにして得るか、獣医師やドッグトレーナーなど専門家の指導の下、段階的にプログラムを進めることが重要である。

子どもたちは生活時間の大部分を学校というある種、閉ざされた場所で過ごしているといえる。だからこそ学校は「たのしい」場所ではなければならない。「たのしい」からこそ、子どもたちは自ら学び知るといふ喜びを味わうことができるだろう。学校犬パディの存在は、多くの子どもたちの学校へ行こう、何かに挑戦しようというモチベーションになりつつある。「おもいやり」や「やさしさ」の通い合う教育を実現する手助けの一つとして動物が与えてくれるものは大きい。

(立教女学院小学校宗教主任)

